

第 4 章

「子どもの学習」へのかかわり

櫻井 茂男



02年調査と比べ、1週間の勉強日数も、1日の勉強時間（学習塾などの時間も含める）も、小学生は増え、中学生は減った。勉強時間を学校の成績との関係で見ると、成績上位群は増える傾向にあり、下位群は減る傾向にある。

● 家での勉強日数が多い小学生

子どもが家で、1週間に何日くらい勉強をするか（学習塾や予備校などでの学習は含めない）をたずねた。回答は、「ほとんど毎日（週に6～7日）」「週に半分以上（週に4～5日）」「週に半分以下（週に2～3日）」「週に1日くらい」「家ではほとんど勉強しない」の5つの選択肢のなかから1つを選択する形式であった。図4-1-1は、学年別に、それぞれの選択肢を選んだ母親の比率を示した。

まず、「ほとんど毎日」と「週に半分以上」の合計によって家でよく勉強をしている子どもの割合をみると、小学生の全学年で、ほぼ7割の子どもがこれに該当する。一方、中学生では5割を切る程度となっている。小学生のほうが中学生よりも家で勉強する日数が多いといえる。ただし、この質問では学習塾や予備校などでの学習を含めていないため、子どもが純粋に学習している日数とはいえない点に注意する必要がある。

また、中学生では各選択肢を選択した割合が均等（2割程度）に近くなっており、小学生に比べると、多様性が認められる。さらに、「家ではほとんど勉強しない」比率をみると、中1生は18.6%、中2生は26.2%である。これはかなり大きな比率である。

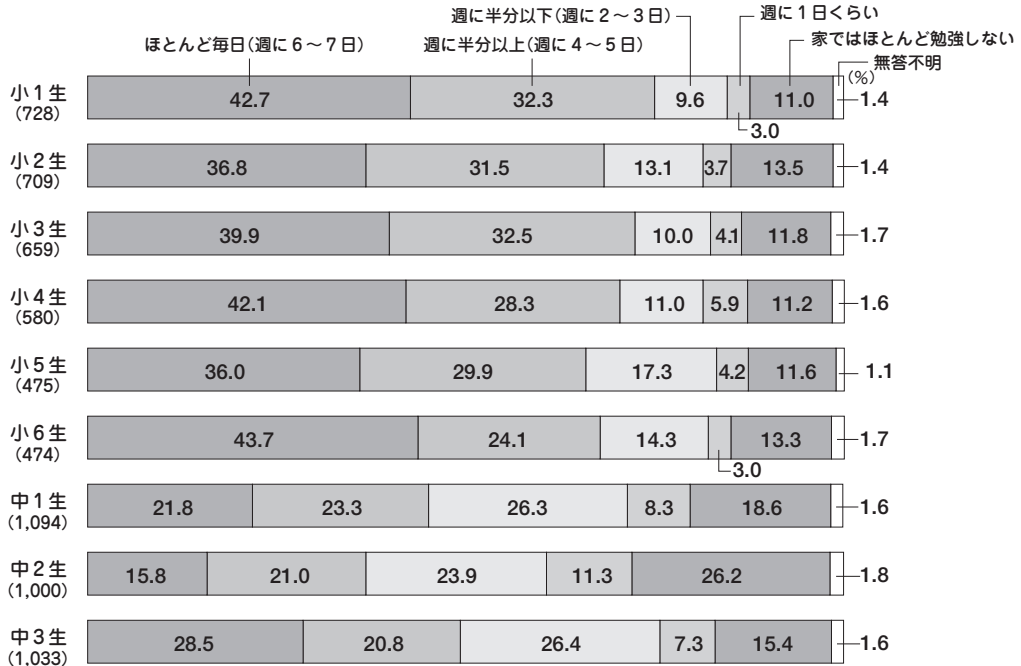
● 小学生における勉強日数の増加

次に、子どもの1週間の勉強日数の平均を、図4-1-2の注2にあるような方法で算出した。そして学年別での変化を折れ線グラフで示し、02年調査のデータと経年比較を行った。

まず、小学生では07年調査のほうが02年調査よりも平均勉強日数が増え、中学生では反対に減っている。小学生の増加はいずれも半日以上であり、中学生の減少はわずかである。勉強日数には学習塾や予備校などでの学習が含まれないため、小学生での増加は、宿題が多く課され、それに費やす時間が増加したためと考えられる。

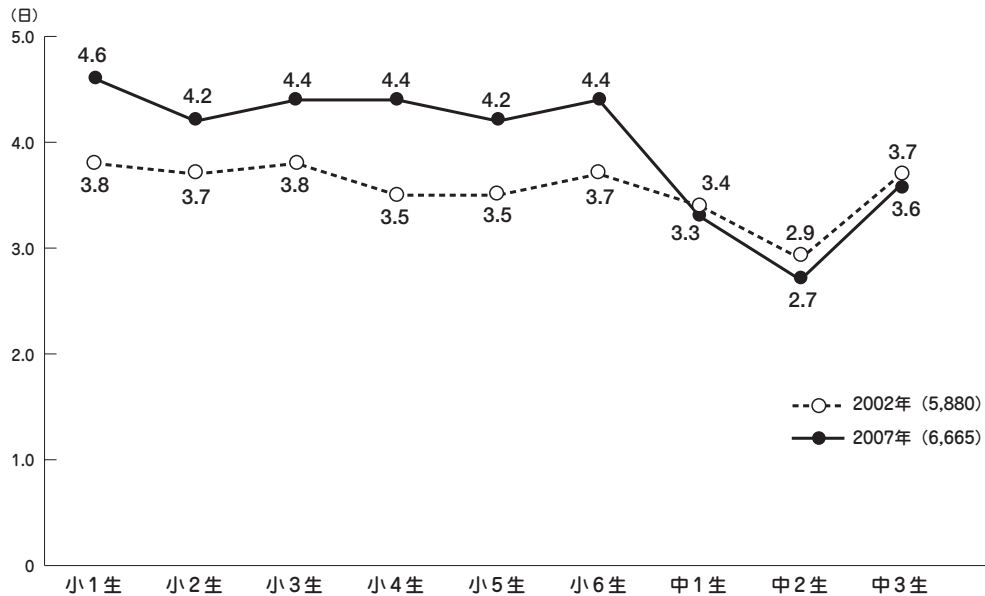
02年調査において勉強日数の平均がもっとも多かったのは小1生と小3生で3.8日、もっとも少なかったのは中2生で2.9日である。その差は0.9日であった。一方、07年調査において勉強日数の平均がもっとも多いのは小1生で4.6日、もっとも少ないのは中2生で2.7日である。その差は1.9日である。両方の差を比べてみると、07年調査のほうが丸1日多い。学年間の勉強日数の差が大きくなっている。

図4-1-1 子どもの勉強日数（学年別）



注1) 勉強日数は、学習塾や予備校などでの学習を除く。
 注2) ()内はサンプル数。

図4-1-2 子どもの平均勉強日数（経年比較 学年別）



注1) 勉強日数は、学習塾や予備校などでの学習を除く。
 注2) 勉強日数の平均は「家ではほとんど勉強しない」を0日、「週に1日くらい」を1日、「週に半分以下(週に2~3日)」を2.5日、「週に半分以下(週に2~3日)」を4.5日、「週に半分以下(週に2~3日)」を6.5日として無答不明を除いて算出した。
 注3) 1998年調査では該当質問項目なし。
 注4) ()内はサンプル数。

● 学校以外でよく勉強する小6生

子どもがふだん（月曜日～金曜日）、学校での授業以外に1日に何時間くらい勉強をするかをたずねた。この質問では、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めている。ここでの勉強時間とは学校以外での総合的な勉強時間とみればよいであろう。回答は、「ほとんどしない」「およそ30分」「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」「それ以上」の9つの選択肢のなかから1つを選択する形式であった。図4-1-3では、9つの選択肢のうち、「2時間」と「2時間30分」を2時間台、「3時間」と「3時間30分」と「それ以上」を3時間以上として1つにまとめ、さらに無答不明を加えた合計7つの選択肢に改変し、各選択肢に該当する回答者の比率を、学年別に示している。

まず、「ほとんどしない」と回答した比率をみると、中1生、中2生が小学生のいずれの学年よりも多くなっている。ただ、「ほとんどしない」に「およそ30分」を加え1時間未満しか勉強しない子どもの比率をみると、小1生から中3生へほぼ単調減少の傾向を示している。この指標でみると、学校の授業以外にあまり勉強しない（1時間未満の）子どもの比率は、学年を追ってほぼ減っているといえよう。

各選択肢の比率が小5生以降で均等化の方向にある。この傾向は勉強日数では中学生以降に認められたが、勉強時間では2年ほど前傾している。多様性の表れが早いといえる。おそらく、小5生あたりから、学習塾での学習が本格化するため、学習塾へ通う子どもとそうでない子どもの勉強時間の差が大きくな

ったためと考えられる。

さらに、2時間以上の勉強時間の比率をみると、小5生で23.9%、小6生で29.4%、中1生で20.8%、中2生で23.7%、中3生で49.7%となっており、中3生に次ぐのが小6生である点が驚きである。

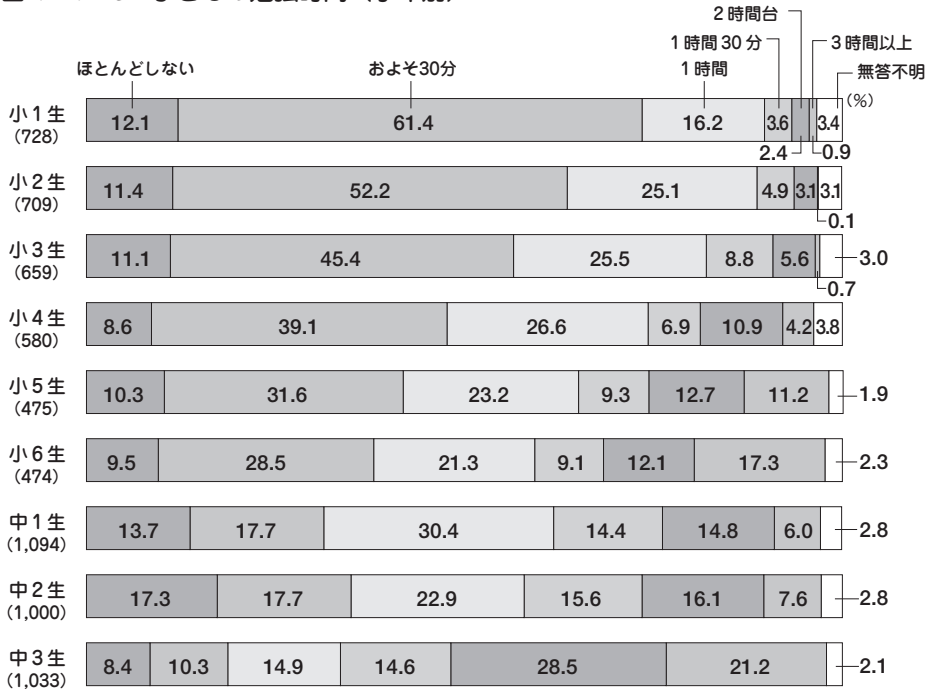
● 学校以外で勉強をしなくなった中2生

子どもの1日の勉強時間の平均を、図4-1-4の注2にあるような方法で算出した。そして学年別での変化を折れ線グラフで示し、02年調査のデータと経年比較を行った。

07年調査と02年調査のグラフの関係は、図4-1-2の勉強日数の平均の場合とよく似ている。小学生については02年調査よりも07年調査の勉強時間のほうが長く、中学生についてはその反対である。小学生は1日の勉強時間が増加し、中学生は減ったということである。07年調査のデータでみると、小4生で1日60分程度、小6生で85分程度、中3生で110分程度である。

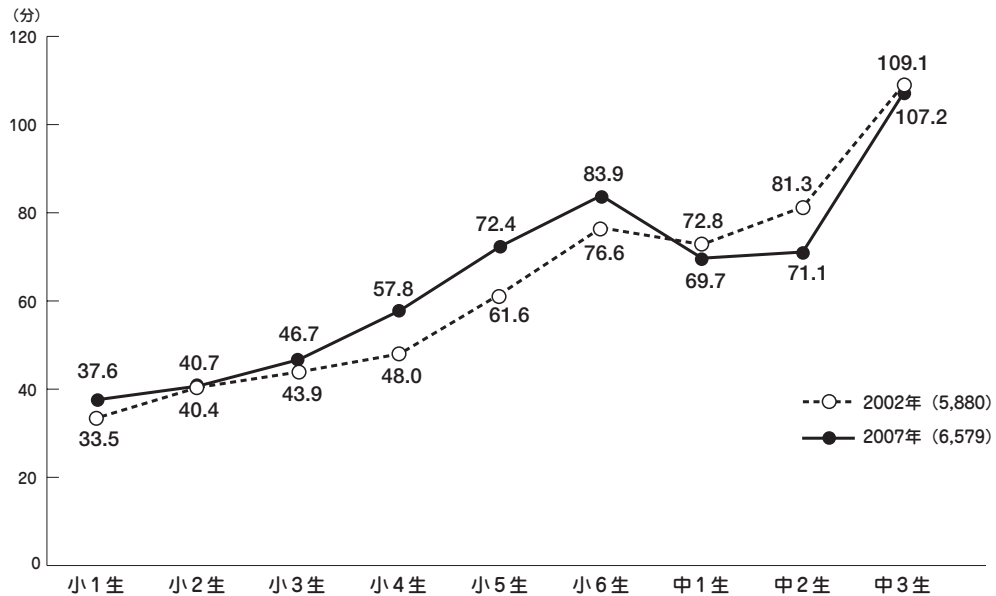
各学年における02年調査と07年調査の差をみると、02年調査からの増加が大きいのは小5生の10.8分、小4生の9.8分、小6生の7.3分である。反対に減少が大きいのは中2生の10.2分である。小学校の中・高学年はよく勉強するようになり、中2生はあまり勉強をしなくなったといえる。中2生から中3生での増加と、小6生から中1生での減少が大きくなっている。小4生から小6生までの勉強時間の増加は、学習塾での勉強時間の増加によるものであろう。中3生の勉強時間に大きな変化がないことから、中3生の学習塾での勉強時間はマックスに達したように思われる。

図4-1-3 子どもの勉強時間（学年別）



注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
 注2) 「2時間台」は「2時間」+「2時間30分」の%。「3時間以上」は「3時間」+「3時間30分」+「それ以上」の%。
 注3) ()内はサンプル数。

図4-1-4 子どもの平均勉強時間（経年比較 学年別）



注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
 注2) 勉強時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」をそれぞれの時間、「それ以上」を240分として無答不明を除いて算出した。
 注3) 1998年調査では該当質問項目なし。
 注4) ()内はサンプル数。

● 学年を追うごとに減少する「中位」の成績

子どもの学校での成績が、クラスの中でどのくらいかをたずねた。回答は「上のほう」「真ん中より上」「真ん中くらい」「真ん中より下」「下のほう」という5つの選択肢のなかから1つを選択する形式であった。図4-1-5には、学年ごとに5つの選択肢を選択した回答者の比率が示されている。

まず、選択肢以外の無答不明の比率をみると、小1生が20%を超えており、小1生の母親にとって自分の子どもの成績評定がかなり困難な課題であることがわかる。

「上位」の成績である「上のほう」と「真ん中より上」の合計の比率をみると、小1生は20%台であるが、小2生から小4生では30%台、小5生からは40%台となる。反対に、「下位」の成績である「真ん中より下」と「下のほう」の合計の比率は、小1生では10%未満、小2生から小6生では10%台、中1生になり20%を超え、中2生以上では30%台となる。当然、「真ん中くらい」という「中位」の成績は、小1生の44.6%から徐々に減少し、中3生では25.2%となる。以上のことは、多くの母親が、自分の子どもの成績がよくわからない小1生は「中位」に評定し、徐々にわかるようになってくると、5つの段階に分化させて評定するようになることを示している。

5つの選択肢を選択した比率が均等化してくるのが中1生くらいからで、各選択肢を選択した比率が10%を超える。このころから、子どもの成績を、かなり相対的に（クラスの中で位置づけて）評価できるようになるのであろう。

「下位」の成績の比率がもっとも高い中2生でも、「上位」の成績の比率は39.4%、「下位」の成績の比率は32.9%と、「上位」の成績の

比率のほうが高く、母親がややよい成績のほうにシフトして評定していることがわかる。

● 成績「上位」の小4生から小6生における学習時間の急激な増加

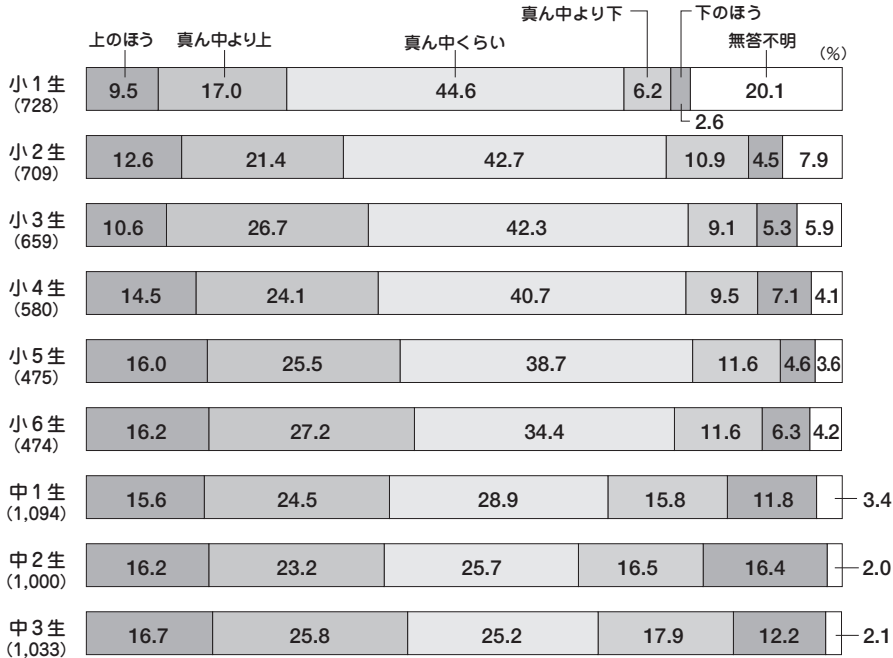
学年ごとに、子どもの学校の成績で3群（「上位」・「中位」・「下位」）に分け、1日の平均勉強時間を算出し、経年比較したものが図4-1-6である（成績の分類方法と平均勉強時間の算出方法は同図の注2と注3を参照）。成績「中位」の結果については図が煩雑になるため割愛した。

まず成績「上位」の変化をみてみよう。小学生では小2生を除き、07年調査のほうが02年調査よりも平均勉強時間が長い。とくに、小4生から小6生の増加は著しく、02年調査から小4生で15.9分、小5生で15.2分、小6生で15.4分増えている。一方、中学生では、中1生はほとんど変わらないが、中2生では8.0分減少し、中3生は4.7分増えている。小4生から小6生における急激な増加は、おそらく、中学受験のために学習塾に入り、そこの勉強時間が増えたためと思われる。

次に成績「下位」の変化をみてみよう。「上位」では小2生と中2生を除き、勉強時間が増加したのに対して、「下位」では多くの学年で減少している。成績「上位」がより勉強をするようになったのに対して、成績「下位」はより勉強をしなくなったということである。

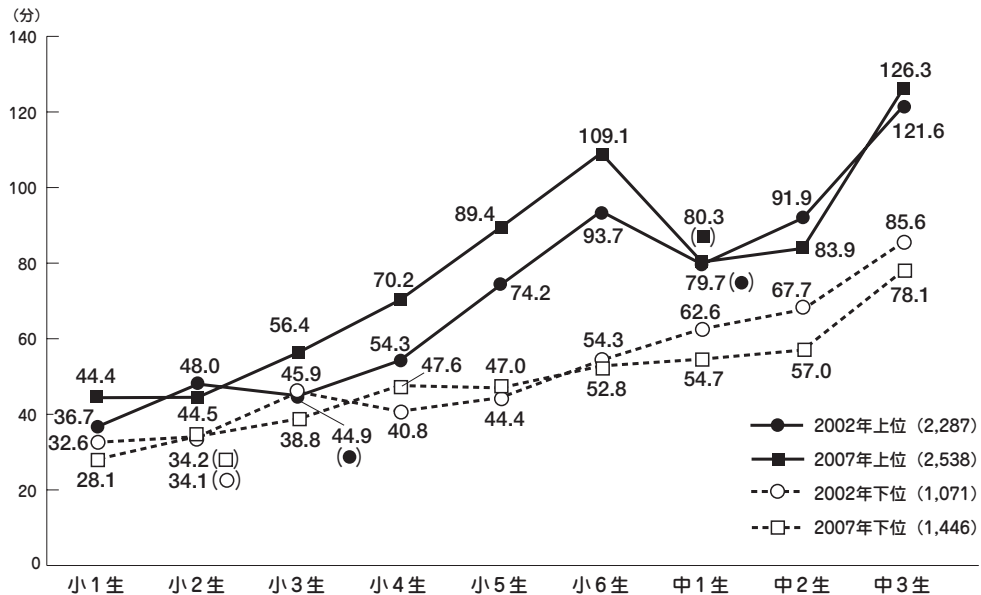
成績の上位群・下位群による勉強時間の差が大きくなっている。成績「下位」では小6生での減少は1.5分と小さいが、中1生では7.9分、中2生では10.7分、中3生では7.5分減少している。また、07年調査の成績「上位」と「下位」の差を検討してみると、小5生、小6生、中3生でとくに大きいことがわかる。

図4-1-5 子どもの学校の成績（学年別）



注) () 内はサンプル数。

図4-1-6 子どもの平均勉強時間（経年比較 学年別×成績別）



- 注1) 勉強時間は、学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間を含む。
 注2) 勉強時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」をそれぞれの時間、「それ以上」を240分として無答不明を除いて算出した。
 注3) 子どもの成績は、「お子様の学校での成績は、クラスの中でどのくらいですか」とたずねた質問で、「上のほう」「真ん中より上」を「上位」、「真ん中くらい」を「中位」、「真ん中より下」「下のほう」を「下位」とした。なお「中位」の数値は省略した。
 注4) 1998年調査では子どもの勉強時間と子どもの成績に関する質問項目についてはたずねていない。
 注5) () 内はサンプル数。

母親の「子どもの学習」へのかかわりについては、02年調査から大きな変化はない。また、『勉強しなさい』と声をかける』ことが多くても、子どもの勉強時間はあまり変わらない。さらに、学校の成績は、声をかけないほうが優れている。

「子どもの学習」への母親のかかわりについて、「学校の宿題を手伝う」をはじめ8つの項目についてその程度をたずねた。回答は「よくある」「時々ある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4つの選択肢から1つを選択する形式であった。図4-2-1には、4つの選択肢のうちの「よくある」と「時々ある」を選択した比率の合計が、学年段階別に、02年調査のデータと比較するかたちで図示されている。

●「勉強しなさい」と声をかけ続ける母親

まず、07年調査のデータについてみてみよう。

「学校の宿題を手伝う」は、もっともよく手伝う小学校低学年の母親でも44.3%（「よくある」＋「時々ある」の％、以下同）であり、それほど多くはない。中学年、高学年と徐々に減り、中学生では13.7%となる。この結果は、学年が進むと学校での勉強内容も難しくなるため、母親が手伝うことも難しくなることを示しているように思われる。「夏休みの宿題を手伝う」も、同様の傾向を示している。

「子どもが勉強していて分からないところを教えてあげる」は、小学校低学年では95.6%とほぼ全員であるが、中学生になると56.9%とほぼ半数になってしまう。学年の進行と

ともに急激に減少する傾向は「学校の宿題を手伝う」「夏休みの宿題を手伝う」と共通している。

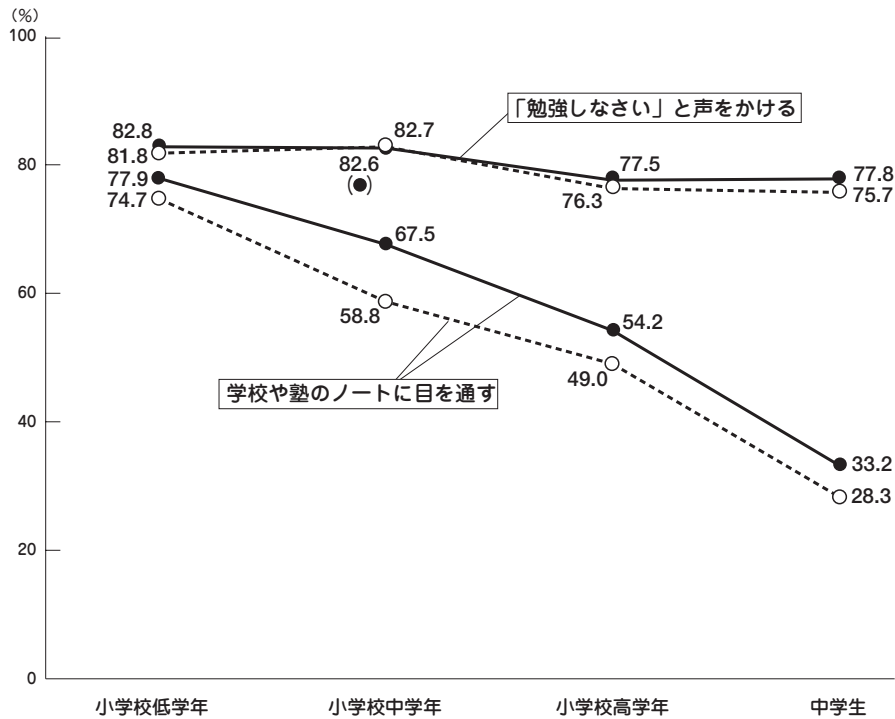
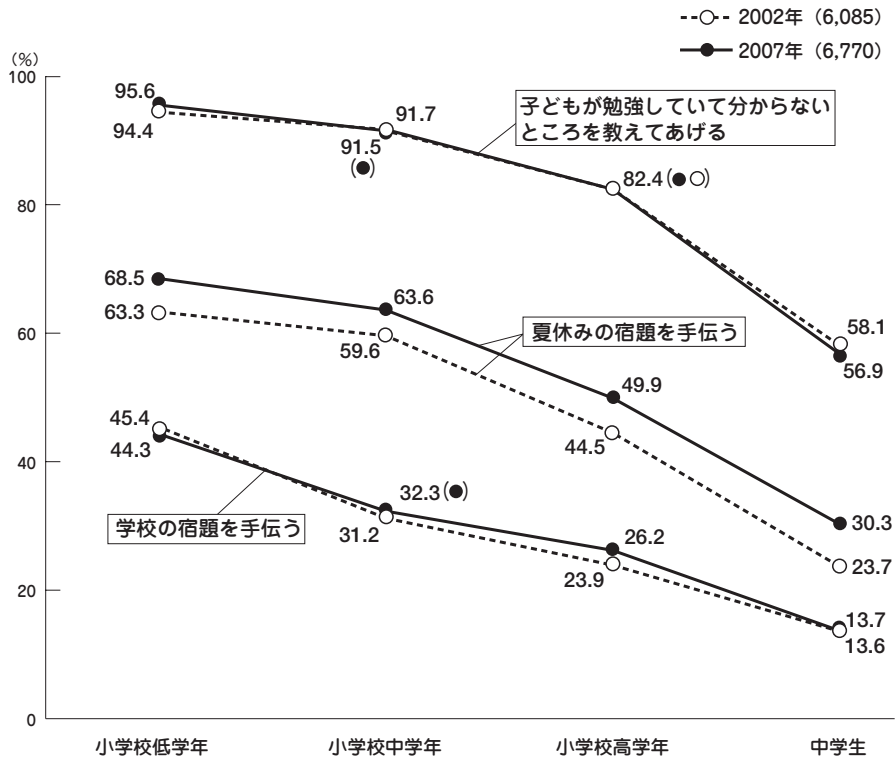
『勉強しなさい』と声をかける』は、どの学年段階でも80%前後で一定している。学校の宿題が手伝えなくても、「勉強しなさい」と声をかけることは頻繁に行うようである。

「学校や塾のノートに目を通す」は、小学校低学年の段階では『勉強しなさい』と声をかける』とほぼ同じ80%近くに達しているが、その後は急激に減る。これまでに紹介したどの項目よりも減少幅は大きい。

●02年調査から母親のかかわりに大きな変化はない

次に、同じ図4-2-1で経年変化についてみてみよう。「学校の宿題を手伝う」「夏休みの宿題を手伝う」「子どもが勉強していて分からないところを教えてあげる」の3項目は、02年調査、07年調査ともに、ほぼ同様に、学年が上がるにつれて下降する傾向を示している。ただ、両調査の差をみると、「夏休みの宿題を手伝う」がどの学年段階でも07年調査のほうが高い比率となっている。同様の傾向は「学校や塾のノートに目を通す」にも認められる。『勉強しなさい』と声をかける』は、02年調査、07年調査とも高い比率で一定している。

図4-2-1 学習へのかかわり（経年比較 学年段階別）



注1) 8項目中5項目を図示した。
 注2) 数値は「よくある」+「時々ある」の%。
 注3) 1998年調査では該当質問項目なし。
 注4) () 内はサンプル数。

図4-2-2は「子どもの学習」へのかかわりと平均勉強時間（同図の注1の方法で算出した1日の平均勉強時間）との関係を示したものである。「子どもの学習」へのかかわりに関する3項目について、「よくある」「時々ある」「あまりない」「ぜんぜんない」の各選択肢を選択した母親の子どもの平均勉強時間を算出し、学年ごとに示した。

● どうみればよいのか？

「勉強しなさい」という声かけの効果

まず、「勉強しなさい」と声をかける」についてみてみよう。巨視的にみれば、4つの選択肢の間には差が認められないようにみえる。このことから、母親が「勉強しなさい」と声をかけている場合も、かけていない場合も、勉強する時間にほぼ差はないと結論できる。ただし、声をかけることによって勉強時間の差がなくなっている可能性も高いと思われる。

次に、微視的にみると、中1生をターニングポイントとして、小学生の場合は「よくある」あるいは「時々ある」を選択した母親の子どもが、そうでない母親の子どもよりも勉強時間が長いといえる。一方、中2生と中3生の場合は、反対に「あまりない」あるいは「ぜんぜんない」を選択した母親の子どものほうが、そうでない母親の子どもよりも勉強時間が長いといえる。とくに、「ぜんぜんない」を選択した母親の子どもの勉強時間が一番長い。このことを重視するならば、小学生のころは「勉強しなさい」と声をかけているほうが、中2生以上では声をかけていないほうが、勉強時間が長いということになる。

● 学校や塾のノートに目を通すことと子どもの勉強時間の関係性

「学校や塾のノートに目を通す」についてはどうだろうか。4つの選択肢の折れ線が明確に分離し、それが学年の進行とともに続いているとすれば、何らかの効果があり、その効果が一定していると考えられる。この項

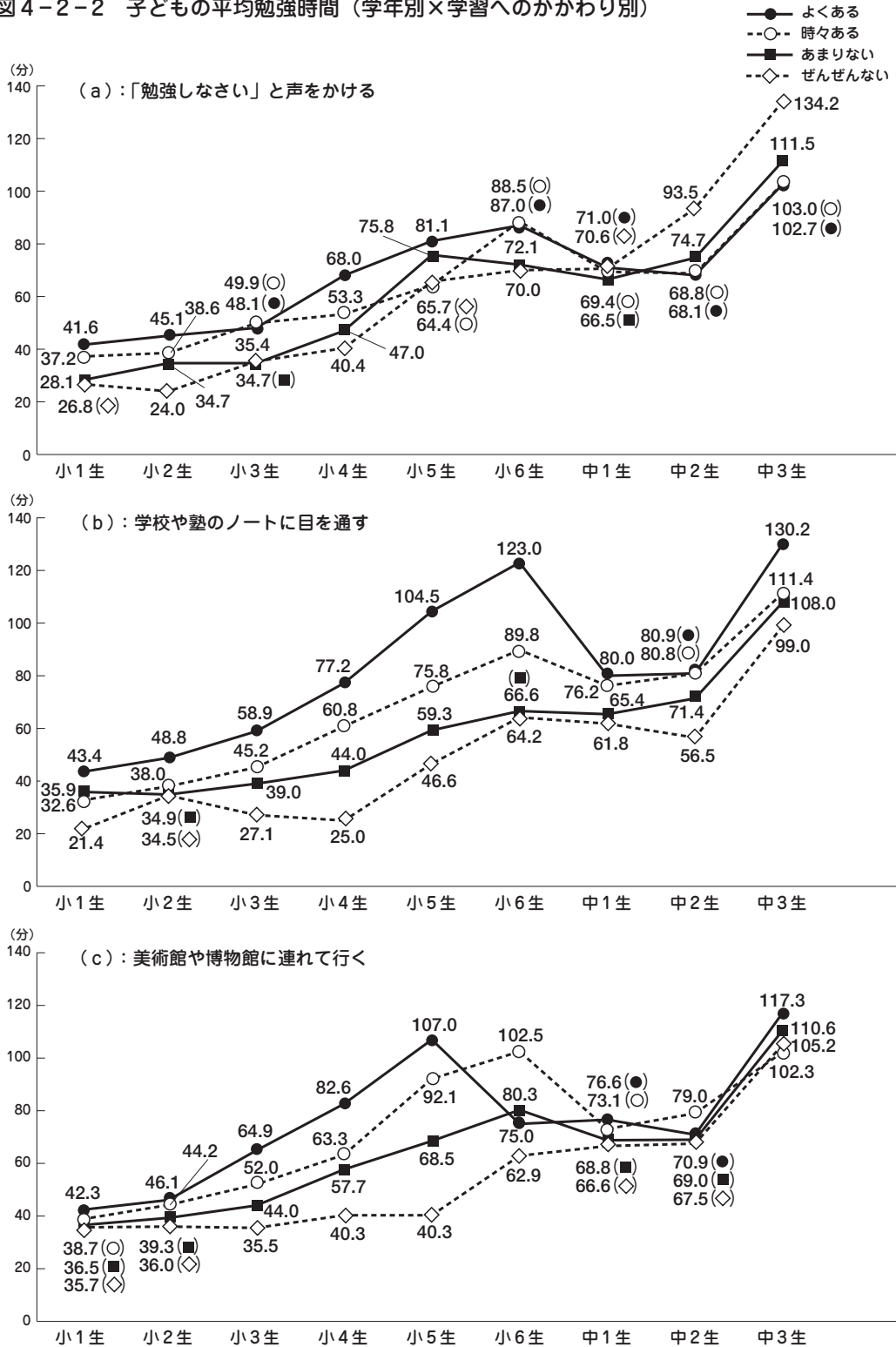
目はそれに該当する。

小3生くらいから4つの折れ線がしっかり分離するようになり、その傾向はほぼ小5生まで続く。この3学年では母親が子どもの学校や塾のノートに目を通す程度が高いほど、勉強時間が長いといえる。小6生では「あまりない」と「ぜんぜんない」の折れ線が接近しているが、それらと「時々ある」の間、および「時々ある」と「よくある」の間には大きな差がみられる。これは「あまりない」と「ぜんぜんない」を一緒にすれば、子どもの勉強時間との間に、「よくある」>「時々ある」>「あまりない」+「ぜんぜんない」という比例関係があることがわかる。また、中2生では「よくある」と「時々ある」が接近し、子どもの勉強時間は「よくある」+「時々ある」>「あまりない」>「ぜんぜんない」という比例関係になっている。中3生では真ん中の2つ（「時々ある」と「あまりない」）を一緒にすれば、勉強時間は「よくある」>「時々ある」+「あまりない」>「ぜんぜんない」という関係になることを示している。全般的にみると、母親が子どもの学校や塾のノートに目を通すかどうかと、子どもの勉強時間とは比例関係にあるといえるのではないだろうか。

● 美術館や博物館が気晴らしになるのは小3生から小5生

「美術館や博物館に連れて行く」については、どうだろうか。4本の折れ線がきれいに分離しているのは、小3生から小5生までである。この間は、母親が子どもを美術館や博物館に連れて行くほど、子どもの勉強時間が長くと解釈できる。この時期の子どもにとっては、美術館や博物館に連れて行ってもらうことが、ある程度の娯楽や気晴らしになっているものと考えられる。また、小1生、小2生では「美術館や博物館に連れて行く」こととの関係はほとんどない。中学生も同様である。

図4-2-2 子どもの平均勉強時間（学年別×学習へのかかわり別）



注1) 勉強時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分、「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」をそれぞれの時間、「それ以上」を240分として無答不明を除いて算出した。
 注2) サンプル数は小1生703名、小2生687名、小3生639名、小4生558名、小5生466名、小6生463名、中1生1,063名、中2生972名、中3生1,011名。

次に、「子どもの学習」へのかかわりをたずねた3項目についてその選択肢ごとに子どもの学校での成績との関係を検討した。子どもの学校での成績の回答ごとに、「上のほう」を5点、「真ん中より上」を4点、「真ん中くらい」を3点、「真ん中より下」を2点、「下のほう」を1点として得点化し、「子どもの学習」へのかかわりの選択肢ごとに平均値を算出した。結果は、学年別×項目別のグラフとして、図4-2-3に示している。グラフが煩雑にならないよう、ここでは「時々ある」と「あまりない」の回答を割愛し、「よくある」と「ぜんぜんない」の回答のみを示している。

● 子どもの成績が悪いと母親は学校の宿題を手伝う

まず、「学校の宿題を手伝う」の結果をみてみよう。「学校の宿題を手伝う」ことが「よくある」と回答した母親の子どもは、学校の成績の平均値が2.0から3.0の範囲にある。3.0より高くなることはなく、「真ん中くらい」以下の成績といえる。一方、「学校の宿題を手伝う」ことが「ぜんぜんない」と回答した母親の子どもは、学校の成績の平均値が3.2から3.8の範囲にある。以上の結果から、「学校の宿題を手伝う」ことが「ぜんぜんない」と回答した母親の子どものほうが、「よくある」と回答した母親の子どもよりも、学校の成績は「上位」であるといえる。子どもの成績が「下位」の場合、母親は子どもの宿題を手伝わざるをえないのかもしれない。

● 学校の成績が悪いと盛んに「勉強しなさい」と声をかける

次に「『勉強しなさい』と声をかける」の

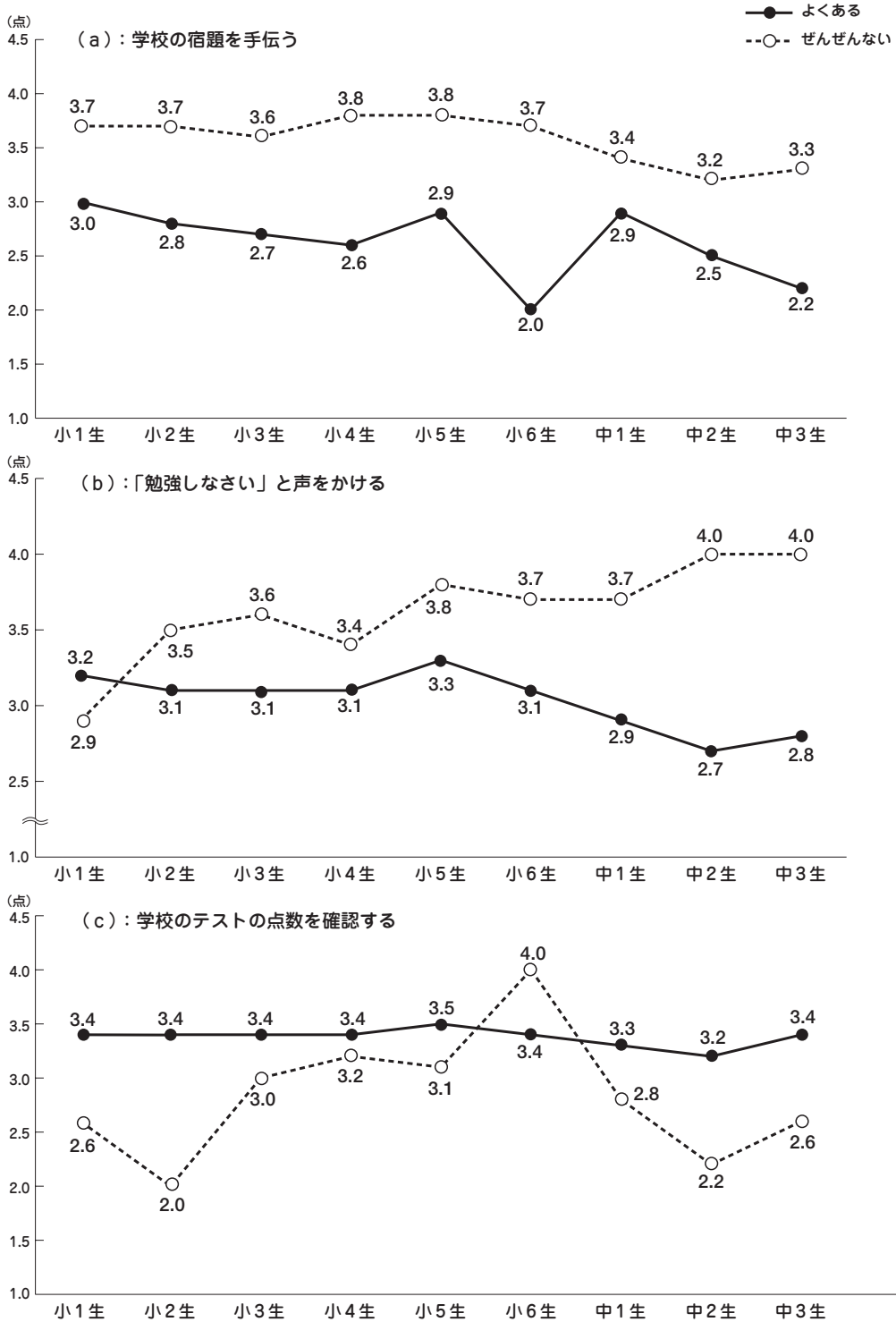
結果をみてみよう。小5生からは安定して、「『勉強しなさい』と声をかける」ことが「ぜんぜんない」と回答した母親の子どもは成績は「上位」であり、「よくある」と回答した母親の子どもは成績が「下位」である。

「ぜんぜんない」の平均値は、小5生で3.8であるが、中2生と中3生では4.0となる。小1生から中3生までをみても増加傾向を示している。一方、「よくある」の平均値は、小学生時代はほぼ一定であるが、中学生になるとやや低下していく。その結果、両群の差は学年とともに拡大している。

● 学校のテストの点数を確認すると子どもの成績はよい

最後に「学校のテストの点数を確認する」の結果をみてみよう。「学校のテストの点数を確認する」ことが「よくある」と回答した母親の子どもは、学校の成績の平均値が3.2から3.5の間にあり、ほぼ一定している。よいとはいえないがふつう以上の成績である。一方、「学校のテストの点数を確認する」ことが「ぜんぜんない」と回答した母親の子どもは、学校の成績の平均値がかなり大きく変動している。小1生の平均値は2.6、小2生は2.0、それから徐々に増大して、小6生では4.0となる。小6生では唯一、「よくある」と回答した母親の子どもの平均値(3.4)より高い。その後は下降していき、中1生で2.8、中2生で2.2、中3生で2.6となる。小6生の結果は特異であるが、それ以外は、「学校のテストの点数を確認する」ことが「よくある」と回答した母親の子どものほうが、「ぜんぜんない」と回答した母親の子どもよりも、成績がよいといえる。とくに、小1生、小2生と中2生、中3生では両者の差が大きい。

図4-2-3 子どもの成績・平均値（学年別×学習へのかかわり別）



注1) 学校の成績の平均値は、「上のほう」を5点、「真ん中より上」を4点、「真ん中くらい」を3点、「真ん中より下」を2点、「下のほう」を1点として無答不明を除いて算出した。

注2) 「時々ある」「あまりない」の数値は省略した。

注3) サンプル数は小1生582名、小2生653名、小3生620名、小4生556名、小5生458名、小6生454名、中1生1,057名、中2生980名、中3生1,011名。このサンプル数は上記注2)の「時々ある」「あまりない」と回答した者を含む。

第3節

「子どもの学習」に対する働きかけ

「どうして子どもは勉強しないといけないの？」という子どもの問いに70%以上の母親が回答した。内容的には、「将来1人で社会生活を営むことができるため」「将来なりたいたいものになるため」「今は勉強すべきときだから」という理由が多かった。

● 70%以上の母親が回答

「どうして子どもは勉強しないといけないの？」と子どもに聞かれたら、母親はどのように答えるのかを、自由記述の形式でたずねた。回答は母親6,770名中4,955名から得られた。回答率は73.2%である。回答者のなかには複数の理由をあげた者もいた。回答は機械的に分類し、分類の過程では最大3つの理由(要素)を抽出した。無答の者、1つ(1要素)だけ回答した者、2つ(2要素)の回答をした者、3つ(3要素)の回答をした者の4つのグループに分け、学年段階別に集計した。その結果を図4-3-1に示している。この図によれば、各学年段階の比率はほぼ一定しており、無答の者(回答なし)は25%前後、1要素の回答者が50%前後、2要素の回答者が20%前後、3要素の回答者が3~4%程度であった。

● 子どもの将来を考えての理由づけが高い回答率

次に、これ以降での分析の対象を決定した。回答者1人あたり1要素(理由)を分析対象にした。この1要素(理由)のなかに、複数の要素(理由)がある場合には、もっとも重要と考えられる要素(ほとんどは一番最初に言及されている要素)とした。したがって、分析対象は4,955名の4,955要素になる。

表4-3-1では、要素を最初に分類した「小分類カテゴリー」と各カテゴリーに該当

する回答者の比率、ならびに、「小分類カテゴリー」をまとめた「分類カテゴリー」と各カテゴリーに該当する回答者の比率を示している。「小分類カテゴリー」は35個あり、それらをまとめた「分類カテゴリー」は17個である。

「分類カテゴリー」のなかで、10%以上の値を示したものを値の高い順にあげると、第一に「将来1人で社会生活を営むことができるため」(25.8%)、第二に「将来なりたいたいものになるため」(23.9%)、第三に「今は勉強すべきときだから」(16.0%)であった。前二者は子どもの将来を考えての回答であり、3番めは将来のために今は勉強をすべきときであるという趣旨の回答であろう。「小分類カテゴリー」で5%を超えるのは、「おとなになるため」「生きていくため」(以上2つは「将来1人で社会生活を営むことができるため」に属する)、「選択肢を広げるため」「夢実現のため」(以上2つは「将来なりたいたいものになるため」に属する)、「後悔したり、おとなになって困らないために」「勉強が仕事であるため」(以上2つは「今は勉強すべきときだから」に属する)であった。

なお、「しなくていいという」という分類・小分類カテゴリーに該当する回答は1件であった。ほとんどの母親は勉強をすることの重要性を説明したいと考えているといえる。

図4-3-1 勉強する理由の要素の数（学年段階別）

	回答なし	1要素	2要素	3要素 (%)
小学校低学年 (1,437)	25.3	50.5	21.4	2.7
小学校中学年 (1,239)	24.6	50.6	21.3	3.5
小学校高学年 (949)	26.1	50.1	19.6	4.2
中学生 (3,127)	28.4	50.2	18.4	3.1

注1) 「もしお子様に『どうして子どもは勉強しないといけないの?』と聞かれたら、あなたはどのように答えますか。お子様に対するあなたの答えを、具体的に下の枠内に書いてください」という質問に対する自由記述の回答を最多3つの要素を抽出して分類作業を行った。

注2) () 内はサンプル数。

表4-3-1 勉強する理由（分類・小分類別）

分類カテゴリー	分類%	小分類カテゴリー	小分類%
1 心豊かに生きていくため	3.8	1 人生が豊かになるため	3.8
2 学習での充実感を得るため	2.8	2 いろいろなことを知るの楽しいため	2.4
3 知識の習得・蓄積のため	4.0	3 学ぶ過程での喜び、悔しさ、達成感などのため	0.4
4 勉強は役に立つため	5.4	4 知らないことを知るため	4.0
5 生涯学習のため	2.7	5 無駄にはならない	0.5
6 勉強できるのはありがたいことであるため	0.2	6 役に立つため	2.8
7 将来1人で社会生活を営むことができるため	25.8	7 知識は役に立つため	2.1
8 生きていく力をつけるため	5.8	8 生涯学習のため	2.7
9 脳の訓練・成長のため	1.1	9 勉強できるのはありがたいことであるため	0.2
10 将来なりたいものになるため	23.9	10 生きていくため	7.8
11 経済的にゆとりのある生活を送るため	0.7	11 おとなになるため	8.0
12 他の人や社会の役に立つため	1.5	12 社会人になるため	2.9
13 今は勉強すべきときだから	16.0	13 親になるため	0.9
14 楽しい学校生活のため	0.4	14 自立するため	3.9
15 自分・将来のため	5.8	15 仕事をしていくうえで必要であるため	2.3
16 子どもに考えさせる	0.2	16 考える力をつけるため	1.4
17 しなくていいという	0.0	17 生きていくうえで必要な力をつけるため	3.6
		18 努力・忍耐力をつけるため	0.8
		19 脳を鍛えるため	1.1
		20 将来何がやりたいかを見つけるため	2.2
		21 夢実現のため	8.5
		22 選択肢を広げるため	9.8
		23 進路、進学のため	3.4
		24 楽しい人生を送るため	0.7
		25 人の役に立つことができるよう	0.6
		26 社会で役立つ人になるため	0.9
		27 勉強が仕事であるため	5.9
		28 おとなになると勉強できなくなる（時間、脳の柔らかさなど）ため	3.0
		29 後悔したり、おとなになって困らないために	7.1
		30 学校生活を楽しく過ごすため	0.2
		31 自分だけ知らないと恥ずかしい、悔しいため	0.2
		32 将来のため	2.9
		33 自分のため	2.9
		34 子どもに考えさせる	0.2
		35 しなくていいという	0.0

注1) 表中の分類・小分類カテゴリーについては、以下のような過程で作業を行った。

①図4-3-1の注にあるように、子どもが勉強する理由を自由記述形式でたずねた質問に対する回答は最多で3つの要素を抽出し、分類の作業を行った。表4-3-1に示したものは、第1要素（もっとも重要と考えられ、通常は一番最初に言及されているもの）の結果を示している。

②分類の作業はまず、要素を35の「小分類カテゴリー」に分類し、その後、35の「小分類カテゴリー」を17の「分類カテゴリー」にくくった。「分類カテゴリー」に属する「小分類カテゴリー」は同じ網掛けや白色で示している。

注2) 回答した4,955名を全体母数としている。

● 学年段階別でも全体の傾向と 同じ理由づけが多い

「どうして子どもは勉強しないといけないの？」という子どもの問いに対する母親の回答（理由づけ）を表4-3-1で示した17の「分類カテゴリー」を用いて学年段階別に集計した。結果は図4-3-2に示している。

学年段階を追って、回答率が大きく変化する「分類カテゴリー」は見当たらない。どの学年段階でも「将来1人で社会生活を営むことができるため」「将来なりたいたいものになるため」「今は勉強すべきときだから」という3つの「分類カテゴリー」で説明する母親が多い。

ただ、この3つの「分類カテゴリー」のうち2つには子どもの成長による変化がみられる。「将来1人で社会生活を営むことができるため」は、小学校低学年では31.8%であるが、徐々に減って、中学生では22.7%になる。学年段階を追うごとに、子どもは成長し、1人で生活できる能力が身についていくため、このような理由も減っていくものと思われる。

反対に、「将来なりたいたいものになるため」は、学年段階を追って増えていく。子どもの成長にともない、職業選択の時期が近づき、職業選択の重要性も感じられるようになるのであろう。そのためにこのカテゴリーによる説明が増えたものと思われる。

「今は勉強すべきときだから」には、上記2つのカテゴリーのような変化はない。ほぼ一定している。

● 自己実現の理由が多い

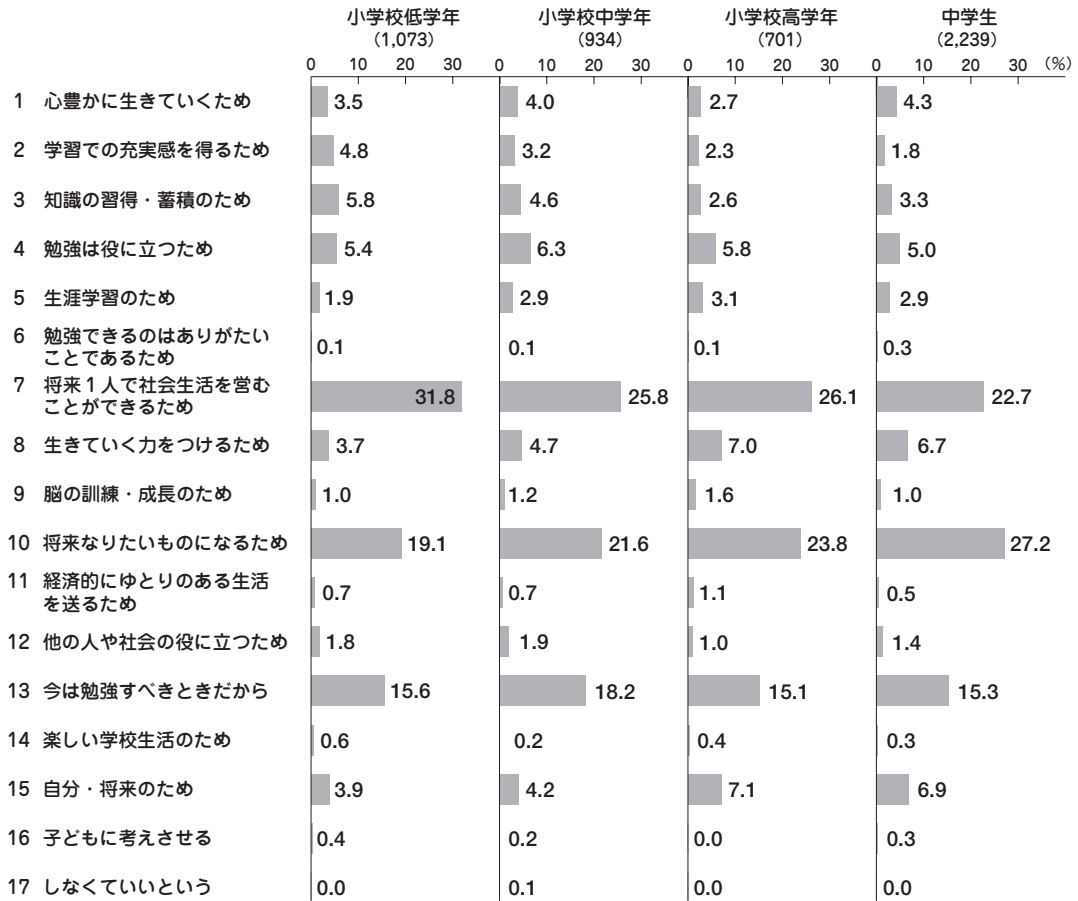
母親が子どもに説明する「子どもが勉強しなければならない理由」は17個のカテゴリーにまとめられた。そこで次に、それらのカテゴリーを心理学（とくに動機づけの心理学）

の立場からさらに集約し、新たな名前をつけ、分析を試みた。

まず、学ぶことのおもしろさや充実感を強調している「学習での充実感を得るため」と「知識の習得・蓄積のため」というカテゴリーを一緒にして「内発的な理由」とした。第二に、子どもの自立を強調している「将来1人で社会生活を営むことができるため」と「生きていく力をつけるため」というカテゴリーをまとめ、「自立的な理由」とした。第三に、子どもの自己実現を強調している「将来なりたいたいものになるため」「他の人や社会の役に立つため」「自分・将来のため」の3つのカテゴリーをまとめて「自己実現的な理由」とした。第四に、「今は勉強すべきときだから」というカテゴリーはそのまま「勉強する時期という理由」とラベルを変えた。第五に、「勉強は役に立つため」というカテゴリーはそのまま「実用的な理由」とラベルを変えた。第六に、「経済的にゆとりのある生活を送るため」というカテゴリーはそのまま「経済的な理由」とラベルを変えた。

この6つの理由で回答者の比率を算出した結果を図4-3-3に示している。「内発的な理由」は学年段階を追うごとに減少していく。学ぶことがおもしろいという説明は、勉強が難しくなるにつれて用いづらくなるのであろう。「自立的な理由」は、小学校高学年でやや高いが、全体としては成長とともに減少傾向を示している。「自己実現的な理由」は増加傾向を示している。先にも指摘したとおり、この理由は子どもの成長にともなって重要性が増す。「勉強する時期という理由」（全学年段階で16%前後）、「実用的な理由」（同5～6%程度）、「経済的な理由」（同1%前後）は、ほぼ一定している。お金持ちになることを理由とする「経済的な理由」がかなり少ない点は特筆すべきかもしれない。

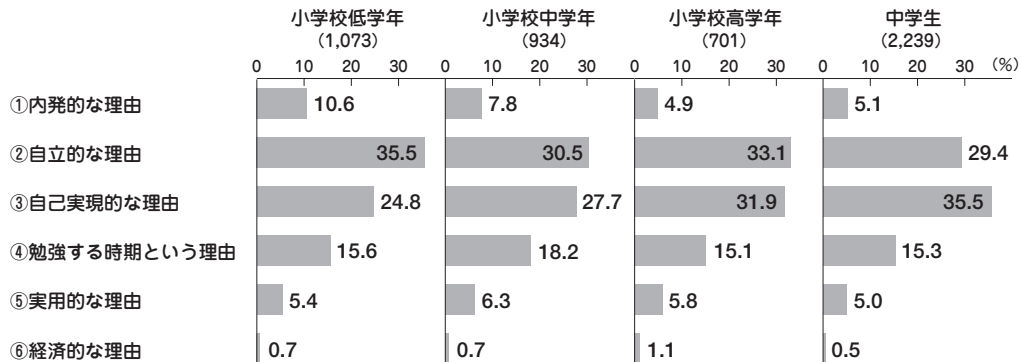
図4-3-2 勉強する理由としてあげられた第1要素の分類カテゴリー（学年段階別）



注1) 回答した4,955名を全体母数としている。

注2) () 内はサンプル数。

図4-3-3 勉強する理由の要素新分類カテゴリー（学年段階別）



注1) 表4-3-1で示した17個の「分類カテゴリー」のなかから、10個を次のとおり6つに再分類し、集計した。①「内発的な理由」は「2. 学習での充実感を得るため」「3. 知識の習得・蓄積のため」、②「自立的な理由」は「7. 将来1人で社会生活を営むことができるため」「8. 生きていく力をつけるため」、③「自己実現的な理由」は「10. 将来なりたいものになるため」「12. 他の人や社会の役に立つため」「15. 自分・将来のため」、④「勉強する時期という理由」は「13. 今は勉強すべきときだから」、⑤「実用的な理由」は「4. 勉強は役に立つため」、⑥「経済的な理由」は「11. 経済的にゆとりのある生活を送るため」を含む。

注2) 回答した4,955名を全体母数としている。() 内はサンプル数。

次に、母親が子どもに説明する「子どもが勉強しなければならない理由」と子どもの学校での成績との関係を分析した。結果は学年段階別に図4-3-4に示した。子どもが勉強しなければならない理由については、17個の「分類カテゴリ」のなかで回答率の高かった3つのカテゴリ、すなわち「将来1人で社会生活を営むことができるため」「将来なりたいたいものになるため」「今は勉強すべきときだから」を取り上げた。また、学校の成績については、同図の注2に示されている方法で、成績「上位」「中位」「下位」に分けた。

● 小4生くらいまでは成績が悪いと自立できることを勉強理由とする

まず、「将来1人で社会生活を営むことができるため」についてみてみよう。このカテゴリは、勉強しなければいけない理由を自立するため、ととらえている。その意味では、子どもの成長によって、回答率が低下するカテゴリであり、先述した図4-3-2ではこの考えを支持している。子どもの学校の成績との関係ではどうであろうか。小学校低学年と中学年では、学校の成績が「下位」であるほど回答率が高くなっている。とくに、中学年では成績の「上位」に比べて、「下位」の回答率が2倍以上高い。小学校の低・中学年では、「学校の成績≒発達」という関係でとらえると、母親は子どもの成績が悪いと子どもが将来自立できないのではないかと心配し、自立できることを勉強する理由のトップにあげると考えられる。小学校高学年では、「上位」と「中位」の間に8.1ポイントの差があるが、中学生では回答率の差はみられない。

● 成績がよいと将来のために勉強することが重要な理由となる

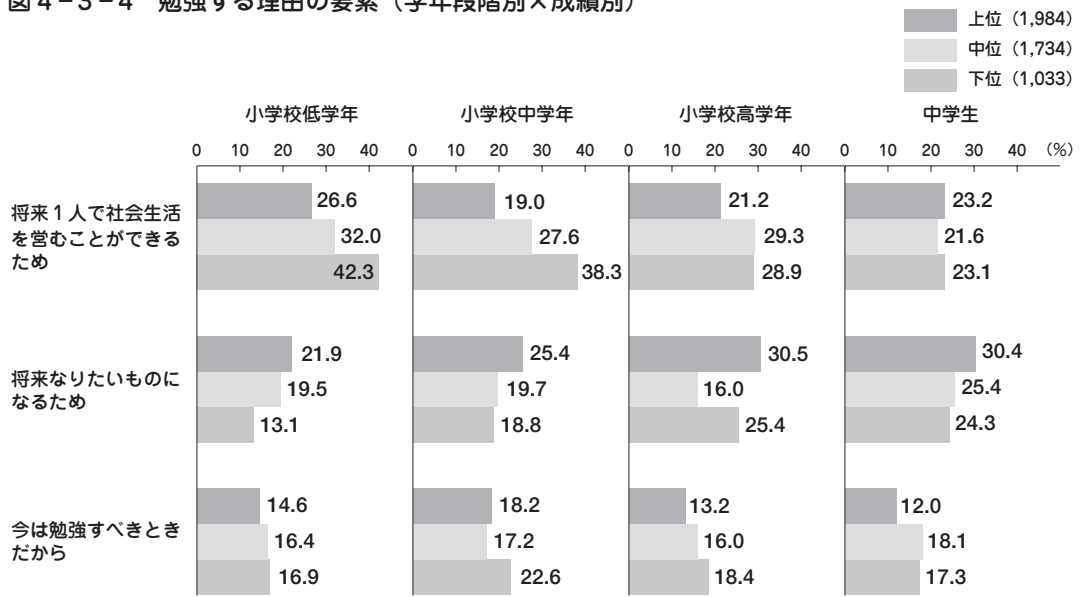
次は、「将来なりたいたいものになるため」についてみてみよう。このカテゴリは子どもの成長とともに回答率が増加していた(図4-3-2参照)。学校の成績との関係においても、先に指摘した「学校の成績≒発達」という関係でとらえれば、成績が「上位」の子どもをもつ(と回答している)母親ほど、回答率は高いものと予想される。

図4-3-4をみると、この予想が支持されている。いずれの学年段階でも成績の「上位」において、回答率が高くなっている。小学校低学年では「中位」と「下位」の差が大きいが、学年段階を追うごとに、「上位」と「中位」の差のほうが大きくなっている。また、「上位」の回答率は小学校高学年までは学校段階を追うごとに、21.9%、25.4%、30.5%と高くなっている。成績「上位」の子どもをもつ母親にとって子どもに示す重要な勉強する理由であることがわかる。

● 今は勉強すべきときという理由は成績下位群で多い

最後に、「今は勉強すべきときだから」についてみてみよう。いずれの学年段階でも、大きな差ではないが、成績「上位」あるいは「中位」に比べて、「下位」が高い回答率となっている。成績が「下位」の子どもに対して、「今は勉強すべきときだから」という理由が用いられやすいといえる。とくに、小学校高学年と中学生で、成績「上位」と「下位」の差が大きい。小学校高学年での成績による回答率の違いは、中学校以降での成績を憂えて、こういった理由で母親が勉強をするように強制することが多いことを暗示しているのではないか。

図 4-3-4 勉強する理由の要素（学年段階別×成績別）



注1) 表4-3-1で示した17個の「分類カテゴリー」のなかから、3つのカテゴリーについて分析。

注2) 子どもの成績は、「お客様の学校での成績は、クラスの中でどのくらいですか」とたずねた質問で、「上のほう」「真ん中より上」を「上位」、「真ん中くらい」を「中位」、「真ん中より下」「下のほう」を「下位」とした。

注3) 回答した4,955名を全体母数としている。

注4) ()内はサンプル数。